
幼馴染

ありま氷炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染

【Nコード】

N6421V

【作者名】

ありま氷炎

【あらすじ】

田舎育ちなのに田舎嫌いの美佳は高校を卒業すると同時に都会へ進学した。それから6年後、妹の結婚式のために帰省することになり、幼馴染と再会する。

6年ぶりの帰省

卒業式を間近に控えたある日、クラスの女子に幼馴染の河野のこ
とを聞かれた。

「河野みたいな不細工な奴と付き合ってるわけないでしょ」

私は変は噂を立てられたくなくて、そう言った。その声は大きか
ったみたいで、教室に入ってきた河野の顔が引きつっていたのがわ
かった。

いつもなら、こっちこそお断りだと言い返す河野が珍しく何も言
わなかった。

ただその丸い顔は引きつり、泣きそうにしているのがわかった。

それっきり私は結局河野と卒業まで話すことはなかった。

高校を卒業し、私は都会の大学に進学した。寮に入り、家に戻る
こともしなかった。

田舎が嫌いだった。

誰もが私を知っているなんて嫌だった。

都会にでて、せいせいした。

他人に無関心な世界は、私にとって大歓迎だった。

誰も私の壁を壊そうとしなかった。

私は私の世界で生きていけた。

社会人になり、私はますます家に帰らなくなった。

しかし、妹が地元で結婚することになり、仕方なく帰ることにな
った。

6年ぶりだった。

駅を降り、私はバスに乗った。

久々に乗ったバスは以前よりはきれいなバスになっていた。

家の近くのバス亭で降り、私は家に向かって歩いた。

家に向かう途中、村の人が幾度となく、久しぶりねと話しかけてきた。

私は適当に愛想笑いし、曖昧に答えながら、家に戻った。

だから田舎は嫌なんだ。

愛想笑いをしすぎて顔を引きつらせながらそんなことを思った。

「お姉ちゃん、久しぶり」

そう言った妹は、私が顔を見せると玄関で満面の笑みを浮かべて迎えてくれた。

「帰ってきてくれてありがとう。お姉ちゃん、田舎嫌いだから帰ってこないかもと心配だったんだ」

「…帰ってくるわよ。だって、妹の結婚式だもん」

妹は私より4つ年下で、高校を卒業し町の役場のアルバイトをしていた。そこで年上の公務員と恋仲になり、結婚することになったみたいだった。

「お姉ちゃん、今日は一緒に寝ようよ。明日から私は山田さんの家で暮らすから」

妹は私の腕を掴みそう言った。

かわいい妹、私のようにひねた性格じゃなくて、素直な子だった。

私にはあわない田舎生活が、妹にはぴったりのようだった。

「母さん、今帰ったぞ。飯はまだか？」

妹と居間にいると父さんの声が聞こえてきた。母さんはいはいといいながら玄関まで走っていく。

「美佳、帰ってきたのか」

相変わらず仏頂面の父さんは私の顔を見ると、ただそう言った。無口な父で、いつも仏頂面をしてる父。

私が田舎嫌いなのは父の影響もあると思う。

父はこの村の出身じゃなかった。

父はこの村を毛嫌いしていた。

しかし30年近く、ここに住み、いまさら元の場所にもどることなどできず、父はこの村に住んでいた。

私は父のように不平を言って、この村に住みたくなかった。

だから、村を出た：

村を出たことを後悔したことなどなかった：

「さて、今日は村の人が飲みに来るわよ！籠さんとか今夜来るから。ぶーたらな顔するのはやめてよね」

「え！？なんで、何で来るの？」

「だって、あんたが久々に帰ってきたし、美貴の最後の夜でしょ？みんな来るっていうんだもん」

母の無邪気な言葉に私は言葉を失った。妹はそうなんだとのほほんとしている。父は無言で晩酌していた。

だから田舎は嫌なんだ。

村の人はほとんどが親戚で、事あるごとに皆で集まり飲んだ。私はそういうのが嫌いだった。

今日集まるのもきつと、美貴を口実にただ飲みにくるようなものだった。

「そうそう、次郎くんも今日来るわよ！」

「…次郎…河野…」

「河野って。あんた本当に昔から変わってるわよね。なんでそんなに他人行儀なんだか…」

母が不思議そうに首をかしげた。

私はこの村で生まれて、育った、

でも村の子のようにあだ名で呼び合ったりするのが苦手だった。

男子は呼び捨て、女子は苗字にさんづけて呼んでいた。

この村をでて、大学に行き、私は友達を作った。すんなりとあだ名で呼ぶ自分にびっくりした。

そしてこの村が苦手だということを実感した。

夜になり、人々が家に集まってきた。

最初のころは私に色々聞いてきたが、酒が入り、あとはどうでもよかった。

私はほっとして、主賓の美貴を置いて宴会を開く部屋から退散した。

そして、サンダルを履き、家の外にでた。

満天の星空が広がっていた。

都会では見られない美しい夜空だった。

そして、私に家に向かって歩いてくる人影を見た。

「…よお、ひさしぶり」

人影は私を見るとそう言った。

私はそれが誰か分からなかった。

背がすらりを高く、中肉のハンサムな男だった。

こんな人、村にいたんだ。

その人は私が凝視しているのを見て、苦笑した。

「美佳。俺だよ。俺。河野次郎」

河野？

私は6年前にあったきりの河野を思い出し、目の前にいる男と照らし合わせた。

確かに顔つきが似ている。

しかし、別人といってもいいくらい違った。

「驚いた？俺やせたんだ。眼鏡もやめたし。これでお前に不細工ななんていわせない」

河野はそう言って皮肉な笑みを浮かべた。

私は自分の顔が真っ赤になるのがわかった。

6年前、クラスメイトに河野とのかげをからかわれ、思わず言ってしまった言葉だった。本当はそんなこと思っていなかった。小学校からずっと同じ面子なのに、クラスから浮く私と普通に接してくれる河野に感謝していた。

ただクラスメイトにからかわれ、嫌だったから、とっさに出た言葉だった。

「美佳、俺の親父。中にいるんだろ？」

「：ああ、うん」

「まったく、すぐ酔いつぶれるくせに飲むんだからよ」

河野は私にそう言いながら家の中に入っていた。

側を通った河野から爽やかな石鹸の香りがした。

変わる人々（前書き）

更新しました。誤字…まだ修正できてないかもしれません。後日修正します。最終話は今週中に更新予定です。

変わる人々

翌日、妹の結婚式が無事に済み、妹は山田さんの家に住むことになった。幸せそうな笑顔の奥に不安そうな様子が見て取れたけど、妹なら大丈夫だと思った。

「…美佳ちゃん！」

夕方、村から少し離れたところにあるスーパーに行くと、小林芽衣子にあった。高校のころは派手な様相で、もてていたのを覚えていた。しかし、今はベビーカーに子どもをのせ、落ち着いた感じだった。

「美佳ちゃん、久しぶりね！美貴ちゃんの結婚式、今日だったんだよね？確か役場の消防課の山田さんと結婚したんだよね！本当いい人にめぐり合ったよかったわねえ」

「う…ん」

小林さんの言葉に私は愛想笑いをしながらうなずいた。

さすが狭い世界…私よりも美貴の旦那さんを知ってる感じで驚いた。

しかも小林さんとは高校生のとき、話したことなどほとんどなかった気がする。こうして私に親しげに話しかけてくること自体、不思議な気がした。

「美佳ちゃん、いつまでいるの？今週末、盆踊りがあるのよ。美佳ちゃんも参加しない。皆参加するわよ」

小林さんはそう言うと言った。

盆踊りか…

そういえばそういうイベントがあったっけ？

小林さんに誘われるなんて思いもしなかった。

私は曖昧に笑うと小林さんに手を振って、別れた。

私は田舎に友達といえるものがいなかった。

クラスの子とは小さいときからずっと一緒にいたのに、なじめなかった。

唯一、親しくしていたのが河野だった。

でも6年前のあの言葉で私は河野を失った。

唯一、友達だった河野を失った。

縁側に来て、ぼんやりと外を見てると虫の声が聞こえてきた。

静かな夜だった。

遠くで隣の笑い声が聞こえる。

河野の奴も家に帰っているのかな。

河野の家は、隣だった。

そのせいもあって、多分、彼は私に構っていたのではないかと思っ

た。

でも私は、あの言葉で彼を傷つけた。

昨日見た、皮肉な笑みがまだ脳裏に残っている。

きっと彼は私のことが嫌いだろう…

「美佳、ちょっと次郎くんのところに行ってきてよ。昨日、借りてた食器返してきて」

「えー。なんで私が！」

「あんた暇でしょ。母さんの手伝いをするとか、そういう気持ちはないの？」

私はそう思ったが、暇であったし、久々の親孝行だと思い、ずっしりと重い大小の食器を持つと河野の家に向かった。

「美佳？ ああ、食器か。貸して」

玄関に出てきた河野はそう言うと、私が両手で抱える食器を軽々と持ち上げた。

これで任務完了…

「美佳、待ってて」

玄関を出て行こうとする私を河野はそう呼び止めて、家の奥へ入っていった。

私は少し考えたが、素直に待つことにした。

「悪い待たせた」

河野はそう言って鍵をジャラジャラ持ちながら現われた。

「これから、盆踊りの練習があるんだよ。美佳も来いよ」

河野は靴を履くと私にそう笑いかけた。

盆踊り、

そういえば、小林さんが言っていたっけ。

今週末…

今週末には帰るつもりなんだけど…

「ほら、いくよ」

河野は玄関で戸惑ってる私の手を強引に掴むと歩き出した。

「ほら、乗って」

そして家の車庫に回ると、助手席のドアを開け、座るように勧めた。

まあ、いいか。

私はとりあえず素直に車に乗った。

盆踊りの場所は村から車で5分ほどの町の体育館だった。

車の中で河野は同級生のことを色々教えてくれた。

クラスの子が今何をしてるかとか、事細かに教えてくれて、私は6年前の記憶を蘇らせ、その変わりように驚いた。

しかし、一番驚いたのは河野の外見だったけど。

体育館につくと、見知った顔が何人もいた。

変わらない私の顔を見て、誰もが久しぶりと話しかけてきた。

6年前は仲良くなんて、できなかったクラスの子たちと普通に話せる自分に驚いた。

そして、あの時、見えなかったクラスの子たちの隠れた性格がわかり、なんだか驚きよりもむずがゆい気持ちになった。

結局、盆踊りの練習後、明日は月曜日だというのに、皆で飲むことになった。

飲むとますます、皆上機嫌になり、私も自分が饒舌になったのに驚いた。

6年前、あんなに距離があったクラスの子たちとこんなに打ち解けることができるなんて信じられなかった。

「参加してよかっただろ？」

「うん：」

車の運転代行を頼み、後部座席に河野と一緒に座りながら私は興奮が冷めやらなかった。

あんなに苦手だったクラスの子とこんなに話せる日が来るなんて思わなかった。

「みんなさあ。都会に行つてずっと帰つてこないお前を気にしてたんだよな。ほら、お前、いつも浮いていただろう？みんなさ、友達

になりたかったけど、なんか話しかけずらいって言ってたんだよな」
私は河野の言葉に苦笑した。

「お前、都会に行って変わったな。いいことだ。みんな驚いたぞ」

『美佳ちゃんってそういう人だったんだ』

そういえば、そんなこと飲みながら言われた気がした。

「なあ。美佳。お前さあ。田舎に戻ってこない？おばさんもおじさんもさびしがってるぞ」

「……」

河野がじつと私を見つめてそう言ったが、私は答えを出せなかった。

やはり田舎が嫌だった。

「じゃ、ありがとうございました。お休みなさい」

代行の運転手を見送り、私は家に帰ろうとした。

するとふいに河野に手を引かれた。そして抱きしめられる。

「お前さ。俺と付き合わない？もう不細工なんていわせない。俺は変わった。都会の男と同じくらいカッコいいと思うけど」

「……飲みすぎだよ」

私はどきどきする心臓を悟られないことを祈りながら、そう言う
と河野の腕から逃れた。

「今日はありがとう。おやすみ」

私はそう言うとき家に向かって走った。

河野に抱かれた体が熱かった。

あのまま、うんって答えていたら、本当に付き合えたのかな。

でも私のそんな甘い考えは、すぐに馬鹿げたことだったと思い知らされた。

河野が不細工と罵った私を好きになってくれるなんてありえない話だった。

仕返し

「美佳ちゃんって相変わらず、つんけんしてたわよね。本当、次郎に不細工なんてよく言ったわよね。昨日次郎、どうしたのかしら？うまく美佳ちゃんを落としたかしら？許さないって言ってたし、当然よね」

それは翌日、母の代わりに買い物に出かけた時に聞こえてきた言葉だった。

町のスーパーの中にある、小さなカフェを通りすぎたときに、聞こえてきた。

そう話していたのは田中さんで、私に背を向けていて私がそこにいることが分からなかったみたいだった。

でも向かいに座っている北野さんが、私に気づき目を見開く。それで田中さんも私が聞いていたのがわかったみたいで、慌てて立ち上がった。

「美佳ちゃん！ごめん。そんなつもりじゃ」

田中さんが泣きそうな顔でそう言った。

やっぱりね。

そういうことか：

だから田舎は嫌い。

クラスの子と打ち解けたなんて、馬鹿なことを考えた：

「気にしないで。わかってるから」

私はそう言う小さなカフェを慌てて後にした。

それからどうやって家に帰ったか覚えていない。買い物をしてこなかった私を母があきれていた。でも蒼白な顔な私に何も言わなかった。

その夜、私は帰る準備をした。

あの冷たい場所に戻りたかった。

誰も私に構わないあの世界に戻りたかった。

「美佳…本当に帰るの？」

「うん、仕事も忙しいし。美貴も幸せそうだったから」

「そう…また帰ってくるのよ」

さびしそうな母を見ながら、私はバスに乗った。

バスから見る光景は変わらなかった。

結局何も変わっていない。

やっぱりこの場所は嫌いだ…

バスの窓からのどかな光景を見ながら私はそう思った。

バスはゆつくりと走り、村を抜けた。そして駅のある町に着いた。

駅近くのバス亭で降り、私はそこで河野の姿を見て驚いた。

河野は車を止め、私を待っていたみたいだった。

「おばさんから聞いて追いかけてきた。帰るの？」

「うん」

「電車まだ時間があるんだろ？ちょっとコーヒー飲もうぜ」

河野はそう言うと言引に私を近くの喫茶店に連れて行った。

「田中から聞いたんだって？」

「うん、まあ。聞きたくて聞いたわけじゃないけど」

アイスコーヒーを二つ頼み、私達は窓際の席に向かい合って座っていた。

「傷ついた？」

「まあ…ね。でもやっぱり思ったけど」

河野の言葉に私は淡々と返事をする。

そんな自分に私自身が驚いた。

「でも、みんな、美佳の変わりように驚いていたのは確かだぜ。だって6年前、お前の態度ひどかったから」

「……」

河野の言葉は私の胸をえぐった。

知っていたけど、事実を突きつけられて苦しかった。

「俺はお前が浮いているのがかわいそうだと思って、世話を焼いていた。でもあんな言葉を言われるなんて思わなかった」

『かわいそう』

河野から出た言葉に私は自分がまた傷つくのがわかった。

でも私は表情を崩さなかった。

傷ついていることを知られるのが悔しかった。

「本当、あの時不細工って言われると思わなかった。おかげでダイエツトする気になったけどな。本当、痩せて、コンタクトにしただけで、もてまくってびっくりしたよ」

河野はそう言葉を続けて笑った。

「だから、お前が戻ってくるってわかって、仕返ししてやろうと思った。だって、あの時俺は本当に傷ついたから」

私は何も答えずただ河野を見つめた。河野はじっと私を見ていた。「でも、つまんないよな。お前は引っかからなかった。こんなにかっこよくなったのに」

河野は残念そうにそう言って笑った。

「……ひっかかりそうになったよ。だって、すごくかっこよくなったから」

「そう？惜しかったなあ」

私は強がりな態度でそう答えた。

本当は勘違いしてしまいそうになった。

河野が自分のことを好きだなんて勘違いするところだった。

「河野……あの時は本当にごめん。本当はそんなこと思っていなかった。ただ皆にからかわれて嫌だったから」

「……わかってる。今はわかるよ」

河野はふわりと笑ってそう答えた。

その笑顔に私は心臓がときどきするのがわかった。

くやしいが、河野は本当にかっこよくなった。

「じゃ、私、帰るね。電車がもう来る時間だから」

私はそう言うと言席を立った。運ばれてきたアイスコーヒーは結局飲む時間がなかった。

「もう戻ってこないのか？」

「うん、私にはやっぱり村があってないから」

喫茶店から出て駅に歩いて向かいながら私達はそんな会話をしていた。

「……そんなことないと思うけど」

「……」

私は苦笑して河野の言葉を聞き流した。

やはりここは私の居場所じゃなかった。

「美佳！」

手を振って構内に入ろうとする私を河野が呼び止める。

「俺、嘘じゃないから。昨日、美佳と付き合いたいと思ったのは本当だから」

私は振り向かなかった。

本当だと思えなかった。

そして私は私の居場所に帰った。

盆踊り

私は家に帰ると休みを返上して、仕事に戻った。

同僚達に田舎はどうだったと聞かれ、適当に笑って答えた。

適当な距離を保って、付き合う同僚達、それが疲れた自分には丁度よかった。

家に帰って、冷えたビールを飲みながら、ぼんやりとテレビを見る。

安らぎの時間。

でもなぜか、心にぽっかり穴があいたような気分だった。

頭に浮かぶのは河野の顔、そして一緒に飲んだクラスメートの子達。

結局、私は何もない。

数日後、盆踊りの前日。

私はメールを貰った。

『美佳。待ってるから。みんな待ってるから。次郎』

それは河野からだった。

メールを見たたん、皆で飲んだこと、河野に抱きしめられたこと、あの時感じた、何とも言えない気持ちを思い出し、鼻がつんと痛くなるのがわかった。

涙が出そうになるのがわかった。

でも、河野のメッセージは信じられなかった。

きっと全部嘘、私をからかうつもりだと思った。

私が過ごしてきて学校、村、すべては私を受け入れてくれない。
私をつまはじきにする。

戻るわけにはいかなかった。

傷つくのは嫌だった。

『おはよう。今日は晴天だ。絶好の盆踊りの夜になりそうだ。次郎』

翌朝、河野からそんなメールを受け取った。

私は無視をした。

期待するのが嫌だった。

でも私はそのメッセージを何度も、何度も読まずにはいられなかった。

きっと、私をからかうつもりだ。

そんなつもりなわけじゃない。

午後5時、

『美佳、盆踊りが始まる。来ないのか？次郎』

河野からまたメッセージが届いた。

私は携帯を机の上に、置き、じっと膝を抱えた。

河野の顔が浮かび、私は胸がどきどきするのがわかった。

午後5時半、

私は携帯を掴むと、小さな鞆に財布を入れ、部屋を出た。
そして駅に向かって駆け出した。

電車に乗り、町に向かった。

駅を降りると、色とりどりの提灯が道路の脇を飾り、屋台が所狭しと店を出していた。

確か、八百屋の近くにいるはずだ。

私は人ごみをぐり抜け、踊る人々を横目に先を急いだ。

八百屋の近くに行くと、同じ色の浴衣を着た団体が見えた。

クラスメートの子達は私を見ると驚いた顔を見せた。

でも柔らかく笑うと温かく迎えてくれた。

そして、顔を出した田中さんがごめんと謝ってきた。

奥にいた、鉢巻を巻き、浴衣の袖をまくりあげた河野は、私を見るときとびっきりの笑顔に向けた。

騙されてみようか。

あの笑顔に。

私はその笑顔を見てそう決めた。

笑われてもいい、騙されていてもいい。

河野の笑顔はきれいだった。

「河野。私と付き合ってよ」

太鼓の音がリズムカルに聞こえ、人々が口々に唄を口ずさむ。そして浴衣を着た人や、洋服を着た人が軽やかに踊る。

そんな中、勇気を出した私の告白に河野が目を丸くしたのがわか

った。

河野は、真っ赤な顔をしてときどきしている私をじっと見た後、口を開いた。

「……俺が本気だと思ったの？」

「！」

やっぱり…

私はその場を逃げ出したくなり俯いた。

「冗談だよ。好きだよ。美佳」

河野はくすつと笑うと、俯いた私の顔にそっとキスをした。

それは優しい触れるようなキスだった。

嘘かもしれない。

仕返しかもしれない。

でも私はその優しいキスに騙されることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6421v/>

幼馴染

2011年8月22日11時07分発行